

## 「残された時」 ～時と感謝と友～

伝道者の書 3:1～13

礼拝の最初に、集ったみなさんと1年の感謝について話してきました。色々な感謝がありましたが、まとめると、①家族に感謝、②健康が守られて感謝、③教会の家族に感謝でした。中でも、一番多かったのが③教会の家族に感謝でした。「教会のみなさんが祈ってくれているのを感じる。自分だけではなく、私の家族も感じている」「みなさんの祈りに支えられている」「みなさんが支えてくれ、相談ののってくれ、思いを共にしてくれる」など様々でした。『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。(マタイ18:20)』を引用された方もいました。教会はギリシャ語のエクレイシア(ἐκκλησία ecclesia)から訳されています。これは「自らの意志によって神を信じた者の集まる集会や会衆、召し出された者たちの集まり」を意味します。『また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ1:22・23)』とあります。神さまは私たち個人にも十分な恵みを与えてくださり感謝はあふれんばかりです。しかし、この教会自体をも恵みとして与えてくださり、その一部分を私たち教会に集う者ひとりひとりが担っていることに改めて気づかされました。自分たちが感謝すると同時に感謝されている恵みに与ってこれからもみなさんと共に神さまを第一に歩みたいです。

次にメッセージです。今回の箇所は伝道者の書3:1～13です。みなさんは時をどのように過ごしていますか？また、その時はどのように失われ、残された時がどのくらいなのか分かりますか？私たちが何を作ったかではなく、どう生きてイエス様の人生を歩んだかが大切なのです。テレビで八重の桜が放送されています。その中に同志社大学の創設者である新島襄が出てきて、彼の生き様が描かれています。彼は心臓病で自分に残された時間が僅かだと知った時、この残された時間にどれだけ神の栄光を現せるか、神さまから与えられた使命を全うできるのかを考え、そのためだけに心血を注いでこの世を去りました。だから彼が亡くなったあと、彼の人生を見て多くの人が「彼は世に与え続ける人だ」と語り継ぎました。ですから私たちは、どう生きるか、そして残された時間(今年の・生涯の)を一時も無駄にしてはならないのです。失われた時間は決して戻ってくることはありません。でも神さまは其中で私たちが正しく生きようとする時に全てのことを益としてくださいます。ですからこの箇所のように全てのものに定まった時があるのです。私たちは、先を見ることができないのです。だからこそ神さまにきいて今を正しく生きなければなりません。それが感情(怒りや悲しみ)によって阻害されてしまうのです。この妨害に負けない手段が感謝です。残された時を生きる私たちは感謝することが全てです。感謝が前提で時を過ごす私たちにとって大切な何かが見つかるのです。聖書の中で、いつも人は複数で登場します。イエス様は『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。(マタイ18:20)』と言われています。それが教会だからです。2人3人集まるからコミュニティーが生まれその集まった人で時を過ごし感謝し合うことで初めて神さまの栄光が現されるのです。私たちは神さまからこの教会で感謝し合える人間関係が与えられているのにそれを大切にすることができなくて時を無駄にして、せっかく与えられた人間関係を無駄にしてしまいます。神さまが十字架にかかられた理由は、神を愛する者たちが隣人と互いに愛し合うためです。ですから残された時を感謝をもって友と過ごしていくために**①すべての時に感謝**をしなさいと聖書に書かれています。初なるの無花果の話があります。人々が感謝できない冬の苦しい時に小さな感謝(実を結ぶ事)ができなければ絶対に大きな恵み(実・テヘナ)を得ることはできないのです。感謝し得ない時に小さな感謝を見つけて、神さまに対してだけでなく自分の周囲の人・隣人に「本当に感謝」していくことが大事です。周囲の人・隣人は私たちの感謝している姿を見えています。感謝している人の口から不平不満は出ません。不平不満は悲しみなどと共にすでに神さまに明け渡していますから、人々の前で語る言葉は感謝しか無くなります。私たちの口から発せられる感謝・賛美で周囲の人・隣人は神さまのことを知ります。ですから**②すべての時に友**をもっていなければ感謝できません。周囲に友はいますか？自分のやるとしていることを支えてくれる友はいますか？「自分はひとりだ」と思っている人は①が足りないからです。周囲の人々と共に手を取り合ってやろうという気がないからです。自分の生き様を見て周囲の人々が自分に関わろうという気になる環境にないのです。私たちは友をもたなくてははいけません。私たちがしようとしていることは絶対に1人ではできません。神さまは「1人でやれ」なんて言っていません。「あなたがた(教会)はキリストのからだであって、ひとりひとは各器官(1コリ12:27)」と書かれています。ひとりひとは各器官としてからだを建てあげ、同じ方向を向いて、同じ目的のために進むから意味があるのです。もしも「自分が…(一番大事)」になると友はどんどんいなくなります。自分が間違っている時に怒ってくれる人・支えてくれる人・向き合ってくれる人はいますか？私たちは、このような人たちを「自分にこんな酷いことを言った」と否定し排除してしまいます。これは違います。こういう人が本当の友です。この代表はイエス様です。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ(マタイ15:15)」と言っています。このイエス様を周囲の人との間におくとたくさん友ができます。友に対して怒ることは誰もがやりたくないことです。ですが、間においている神さまから見せられた友のビジョンとその友の行動が違うのであれば注意するのが本当の友です。ですから、私たちは一時たりとも無駄にせずすべての時に友をもっていなければなりません。(ルカ11:6～10)私たちが友を見いだすためには「何かのために」が大事です。誰のために努力していますか？8節に「友のために」とあります。友のためにやり続けるなら誰かが助けてくれるのです。そして、私たちには定められた時があるので**③一時も無駄にしない**で行動しなければいけません。やらなければいけないことは、コツコツやるタイプですか？それともギリギリになってイライラしながらやるタイプですか？後述の人が多いと思います。この場合、やるまでの時間を無駄に過ごしている可能性があります。大事なものは、そのやらなければいけない事をいつも考えていることです。どのようにすれば良いのか(工程)・完成図を描いておくことが大事なのです。工程や完成図も無くその場しのぎでやっているとたまたまなことになるってしまいます。でたらめなことは自分に関わっている人の誰にも引き継いでもらうことはできません。ですから一時も無駄にせず、自分のやってきたことを誰かが引き継げる素晴らしい時にしていきましょう。(要約者：行司 佳世)